

ベストピア
Bestopia

「パリ通信 7号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成二十四年七月
第七号

< 2012年7月 >

古賀 順子

「夏のフェスティバル」

いよいよ7月。待ちに待ったバカンスが始まります。学校関係は7・8月丸々2ヶ月の休み。普通に働く人たちも最低2-3週間の夏休みを取ります。7月に休む人を「ジュリエット」、8月に取る人を「アウシアン」(フランス語で7月は juillet/ジュリエ、8月は août/ウット)という言葉ができる程、フランス人にとって夏のバカンスは重要です。

「ツール・ド・フランス」(今年は第99回。6月30日から7月22日まで)のキャラバン隊を追いかけフランス各地をまわる人、地元でのんびり過ごす人、バカンスの過ごし方は人様々ですが、夏のフェスティバルも根強い人気があります。1947年ジャン・ヴィラルが始めた「アヴィニオン演劇祭」には日本からも多くの人々が参加、観劇に來られます。87年、法王庁の中庭で夜21時から翌朝まで、延々9時間かけて上演されたポール・クローデル作『繻子の靴』(演出は戦後の仏演劇を牽引してきたアントワヌ・ヴィテーズ)(90年没)を観ました。座席には一人一人毛布が用意してあり、途中で帰るもよし、眠るもよし、朝まで演じ続ける俳優たちのタフさに心から感動しました。その「アヴィニオン演劇祭」も今年は66回目を迎えます。オペラや音楽が好きな人には「エクサンプロバンス・フェスティバル」(7月5日から27日)。「アルル写真フェスティバル」(7月2日から9月23日)もあります。遠くまで行かなくても、「パリ・ジャズ・フェスティバル」、パリ・シャトレ劇場主催

「ダンスの夏」、パリ近郊エルムノンヴィルの「ルソー祭」(今年は啓蒙思想家ジャン＝ジャック・ルソーの生誕300周年。エルムノンヴィルは彼の没地)など、実に様々な企画があり、場所も日程もプログラムも選ぶのに苦労します。

そして夏のフェスティバルの主演は青い空。シーズン中のコンサート・ホールや室内劇場を離れ、太陽と自然を感じながら観る舞台。いい音楽を聴いて、好きな芝居を観て、見上げれば抜けるように高い青空。これ以上何も望むことはありません。

この春、福島県出身で、現在は東京稲城市にある医療システム会社の社長をされている方の通訳をする機会がありました。「知恵子は東京に空がないと言ふ。ほんとの空がみたいと言ふ。私は驚いて空を見る。」という詩がありますが、智恵子の生家二本松の空にはずいぶん放射能が飛んでいるのですよ。智恵子が生きていたらどんなにか悲しむでしょう。その言葉が心に残っています。「あどけない話」と題して、『智恵子抄』に収められた詩です(高村光太郎の生涯については、『高村光太郎ー智恵子と遊ぶ夢幻の生』(湯原かの子著ミネルヴァ書房)を読んでください)。精神を病み、狂気に苦しむ智恵子が見ていた本当の「心の空」は、生まれ故郷の「阿多多羅山の上に毎日出ている青い空」でした。

だれにも「心の空」があると思います。故郷の空、思い出の空、嬉しいとき、悲しいときに見上げた空。各地のフェスティバルへ行って、夏の青く美しい空に感動し、その空が「心の空」を思い起こさせてくれるとき、バカンスが終わったらまた仕事がんばろう、そんな素直な気持ちになります。